

## “日労”系指導者の戦後と『社会思潮』(5・完)

松井政吉氏に聞く

はじめに

- 1 戦前期の活動と日本労農党
  - (1) 戦前期の活動
  - (2) 日労党の理念と指導者(以上, 第470号)
  - (3) 戦時体制の成立と三輪寿壮
- 2 日本社会党の結成と“日労”系の指導者
  - (1) “日労”系指導者の公職追放(以上, 第472号)
  - (2) “日労”系の結集と社会経済研究会
  - (3) 日本政治経済研究所の設立(以上, 第475号)
- 3 『社会思潮』の創刊と編集
  - (1) 創刊の経緯(以上, 第477号)
  - (2) 『社会思潮』の編集(本号)

### (2) 『社会思潮』の編集

#### 社会思潮編集局の設置

丸岡家の記録によれば, 1946年10月, 社会思潮社内に新しく「社会思潮編集局」という部門が設置されています。社会思潮社それ自体, もともと丸岡尚氏が機関誌の『社会思潮』を発行するためにわざわざ設立した出版社だったそうです。

丸岡ミサオさんはこの社会思潮編集局について, 『社会思潮』の編集を日本社会党との連絡を密にして行うための機関として設置したものだろう, とのことでした。この社会思潮編集局は, 党内において正式に認められて

いた機構ないし機関の一つだったのでしょうか。

松井 僕は何も知らない。社会思潮社が設立されたこと, 社会党の機関誌が丸岡尚さんが経営する出版社から発行することになったこと, これらのことについては丸岡さんから直接, 聞いて知っていました。けれども, さらに細かく社会思潮編集局が設置されて, 党のほうと打ち合わせを密にして編集発行していたという話については, 僕は誰からも聞いていないのです。

考えて見れば当時, 社会党は革新を求める国民の期待を受けて上げ潮にありました。組織が一気に膨張したという感じです。党員は高い志を抱き, 目標もはっきりしていて毎日の活動に

精一杯、取り組んでおりました。こういう状況ですから、党の中央でも組織機構をどうのこうのしようという意識はそんなになかったのだろう。

僕の社会党福島県連合会だって、もちろん組織規約があり役員もいたわけだけれども、極端に言えば看板が掲げられているだけで、組織機構がきちんと整っていたわけではなかったのです。執行部の会議などは定例の開催でなく、問題があればそのつど開くという行き当たりばったりだったのです。

社会党の組織機構は、僕らが日々の活動に走り回りながら、だんだんと整えていったという経過だったと思います。浅沼を座長とする組織委員会が設置され、そのメンバーの一人に僕が入っていたことだって、手紙で連絡を受けて初めて知りました。社会思潮編集局だって、水長（水谷長三郎）が杉山元治郎さんや浅沼（稲次郎）と相談して、「それじゃ作ろうか」ということで設置したにちがいない。

こういう問題は幹部の一存でなく、機関決定で行われるものではありませんか。

松井 建前はそうです。すべての決定は常任中央執行委員会の承認・了解がなければならぬことは組織原則です。しかし常任中央執行委員はそれぞれ責任の専門部をもっていたのであり、専門部の決裁事項の場合、その部長の権限で決定、ないしは判断が任されていることもあったはずです。実際に出版部が設置されたのはのちのことで、機関誌の発行は当時、情報宣伝部の管轄でしたから、社会思潮編集局の設置の問題は水長の一存で決めても何ら構わないと思うよ。

ところで、この社会思潮編集局に、日本社会党の本部から書記などが出向して編集実務を担ったという事実はないようです。丸岡家の資料では編集局のスタッフは全員、社

会思潮社の社員でした。また専任の担当者は岩根正雄さんという方で、この岩根さんという方が『社会思潮』の実際の編集長だったようです。

松井 僕は岩根正雄という人の記憶はうすいのです。あなたは僕への手紙で、社会党の機関誌を外部の出版社に頼み、編集も党の外で行っていたことを政権党として問題である、と指摘していました。

責められても僕はどうしようもない。当時、社会党には資金も紙も編集を行う書記もいなかったのです。このことは事実であり認めざるを得ない。

しかし何もかも条件が整ってから機関誌を出そうというのであれば、むしろこれは問題だと思えますよ。党員はもちろんですが、国民は社会党に期待していました。これは肌で感じられ、早期に機関誌を発行しなければならない状況にありました。そうした条件の中で、すなわち国民から期待されながら自前で機関誌を発行できないという条件の中で、党の幹部が経営する外部の出版社に発行や編集実務を頼んだからといって非難されることはないだろう。

礼を欠く質問書であったようで、まげてお詫び申し上げます。ところで、社会思潮編集局は日本社会党の事実上の出版部だったのでしょうか。

松井 どういうことかい？

この間、占領期の日本社会党における出版部の事業について調べておりました。社会党の出版部は1948（昭和23）年1月1日、党務報告などを伝達する党内情報紙としてタブロイド判の『日本社会党党報』を発行しています。編集発行人は細田綱吉氏でした。この『日本社会党党報』は同年12月22日付の第48号から『社会週報』（編集発行人・下條恭平）と改題されています。

当時、日本社会党の出版部の活動として行われていた事業はこの『日本社会党党報』や『社会週報』の発行だけで、図書出版は行っていなかったようなんです。しかし社会思潮編集局は、近代の日本社会運動史を人物で綴った鍵田研一著『第三の太陽』(1948年)や、中正雄著『先駆者の系譜 社会党前史』(1949年)、ノア・パロー著『英国労働組合』(同)などの図書出版を行っています。どうも、本来ならば日本社会党の出版部が発行すべき出版物を社会思潮編集局が出していたという経過が見られるのです。

松井 社会党の中央執行委員として、あるいは代議士となつてからの党における僕が受け持った役員は総務部や総務局が中心でした。僕は、出版部やのちの機関紙局のことについてまったくタッチしていない。だからあなたからそうした細々としたことを質問されても、こっちは知らないのだから答えようがない。

#### 細田綱吉について

松井 細田さんの名前が出ましたので、ここで彼のことについて少し述べておきます。細田さんは三輪(寿壮)先生と同じく弁護士でした。細田さんは三輪先生や河野密らと日労党(日本労農党)の結成に参加した経歴をもつ、日労系における長老的な指導者の一人でした。先ほど水長(水谷長三郎)のことが話題になりましたが、僕は、細田さんが水長とは別な意味で日本の社会運動史において顧みられていないことを残念に思っています。

細田さんは戦前、細野三千雄さんたちと全農の顧問弁護士をされ、のちの全国大衆党や全国労農大衆党における農民運動の指導をされた方です。弁護士としての職業柄なんだろうが、社会運動家に見られるような激しさは無く、とても謙虚で控え目な方でした。細田さんは戦後最

初の総選挙に茨城県第3区から出て当選し、何期か代議士を務めています。僕は隣の福島県で、このことや、同じ中央執行委員を務めていたこともあって細田さんとは親しく付き合いをさせていただきました。

いま、社会党の出版部のことが話に出ました。細田さんは社会党における最初の出版部長でした。現在は機関紙局に編集部を置いて『月刊社会党』などを発行していますが、当時の出版部は党の決定や指示を党員に知らせる党報を発行するだけで、枢要なポストではなかったのです。

代議士は当選を重ねますと、さらに箔をつけるためポストや名誉を求めるものです。当時、社会党にあっては同じ代議士でも大臣となつて片山・芦田内閣の表舞台に立つ人や、国会の常任委員長に就任する人、党の高いポストに就く人もいたわけです。細田さんは誰も望まない党の出版部を引き受け、ほかに代議士在任中、農民部の副部長に就いたくらいだったと思います。

細田さんは日労系の中でも細野三千雄さんと並んで静かな人で、枢要なポストにも就いていないから忘れられています。社会党はもう4、5年たちますと結党50周年を迎えます。僕は、社会党がこの機会に党の結成や発展に貢献・寄与した関係者を紹介する『日本社会党人物事典』というような本を出版したらいいな、と思っています。僕は土井(たか子)さんに提案しようと思っています。

#### 日労系が編集を主導

お送りしました資料の中に「社会思潮編集委員会委員一覧(昭和22年10月)」という資料があったと思います。これです。この資料は丸岡尚氏の遺品の中にあつたものですが、これによりますと『社会思潮』の編集委

員は片山哲，水谷長三郎（主幹），浅沼稻次郎，杉山元治郎，森戸辰男，和田博雄，河上丈太郎，三輪寿壮，河野密，丸岡尚（編集発行人）の10人があげられています。『社会思潮』の編集は，日労系の方々が担っていたことは間違いのないのですね。

松井 顔触れをみても，実際にもそう言うてよいだろう。片山さんは党の委員長で，内閣総理大臣です。だから編集会議に出席することは考えにくく，名目的な存在であったと思います。水長はもともとの“戸籍”は左派です。けれども戦後は片山・西尾さんと行動を共にし，社民系の右派に属していました。また和田博雄さんは当時，片山内閣の安本長官（経済安定本部総務長官）でしたが，参議院の緑風会に属しててまだ社会党に入っていなかったはずですよ。

この名簿では片山，水谷，和田の3人を除き残り全員が日労系で，党内の派閥では中間派にありました。前回にも述べましたが森戸さんは事実上，日労系の代議士を束ねる存在にありました。実際に森戸さんは浅沼が病氣中は，文部大臣にあっても日労系の連中の相談に乗っていたのです。

日労系における特徴の一つは，党や政治のあり方としてみた場合，議会主義に立脚していることです。マルクス主義の理論やイデオロギーの研究を大事にしないというのではないけれども，日労系は，議会主義を基本としていますから，現実政治への対処や当面の政策課題の実現をより重視していたのです。政治改革の契機をどうつかむか，具体的な政策をどう企画立案するか，というような問題により関心がありました。ある意味では日労系は社会党におけるインテリゲンチヤの集団，ないしは政策集団としての要素があったと思いますよ。この『社会思潮』の編集委員の名簿をざっと見て，僕は，「社会党を代表する政策家の連中を集めているな」と

思いました。

“和田グループ”と左派

社会党においては一般に“人事の右派，政策の左派”といわれていますが。

松井 いやいや……。

たとえば1951年10月，社会党が左右に分裂したとき和田博雄氏が左派社会党の書記長になっております。和田氏は書記長時代や，55年10月における統一回復後も左派の政策立案をリードしていたと思います。

松井 官僚出身の和田グループを指しているなら多少は当たっていると思うが，一般論として“政策の左派”とはいえないだろう。左派に，ブレンとして労農系の学者はいました。けれども左派の国会議員に，自民党や官僚が政策家として注目するような理知派の人物はいたのだろうか。

左派の領袖は鈴木茂三郎さんです。この鈴木さんのグループに確かにササコウ（佐々木更三）や島上善五郎，それに労働農民党系では山花秀雄らがいます。現在の山花貞夫は秀雄の息子です。彼らは運動家であって，どう見ても政策家とはいえないだろう。左派といわれる連中に政治哲学をもつ，れっきとしたインテリはいなかった。これが左派の限界なんです。

他方，和田系ないし和田さんの系譜には政策家といわれるインテリが多い。すぐ浮かぶ人物に佐多忠隆，勝間田清一らがいます。佐多忠隆さんは東京帝大の新人会の出身で，三輪先生や河野密の後輩にあたります。佐多さんは近衛内閣のときに企画院の調査官として招かれ，和田さんを代表とする委員会に勝間田清一，稲葉秀三，正木千冬，和田耕作さんなどと参加して，いわゆる近衛内閣の“経済新体制”の骨格を策定した経歴があります。和田さんは例の企画院事件の被告の一人です。

勝間田さんも同じです。勝間田さんは京都帝大で農政学を学び、内閣直属の調査局をへて企画院に入ったわけだけれども、経済に精通した政策マンでもあったのです。彼は社会党における理論グループのひとりでもありました。だから、のちに党の政策調査部長や政策審議会の会長となったのです。

僕は昨日、頼まれて昭和30年代半ばにおける炭労の政転闘争に対する勝間田さんの考えや党の方針について、追憶の原稿を書いたばかりです。彼は当時、党の政策審議会議長として日本の産業・エネルギー政策についても独自の構想をもっていました。勝間田さんは、ただただ反対というのではなく、きちんと対案も出していたのです。

おもしろいじゃないか。戦前、企画院事件で治安維持法に違反したとして検挙された和田博雄、勝間田清一、佐多忠隆、稲葉秀三さんたちが戦後、経済安定本部にふたたび結集したわけです。経済安定本部は日本経済復興の政策官庁です。和田さんが経済安定本部の総務長官や物価庁の長官のとき、勝間田さんが彼の秘書官で、佐多さんが安本の筆頭局長（財政金融局長、第二副長官心得）でした。さらに、和田さんが左派社会党の書記長として、あるいは統一後の党の政策審議会の会長となったとき、彼を補佐したのが勝間田さんと佐多さんたちであって、稲葉さんは和田さんのブレーンとして提言をしていたのです。

僕らは当時、和田さんたち企画院組を社会党における“官僚派”と呼んでいました。彼らは学識が深く、実務にも精通していました。社会党において一時期、この“官僚派”が政策立案をリードしていたのです。しかしご承知の通り社会党は片山・芦田内閣ののち二度と政権を担当することがなかったため、これらの“官僚派”が存分に実力を発揮することはなかったの

です。僕は和田グループを左派と見るのに反対です。和田グループは左派右派の範疇を超えた、社会党における“官僚派”としてくくって、その役割を評価すべきです。

#### 和田博雄と東畑精一

『社会思潮』の編集委員のことに話を戻します。岩田祥子さんによれば、和田博雄氏が編集委員になったのは丸岡尚氏が東大教授の東畑精一氏を通じて頼んだからだろう、ということでした。丸岡家と東畑家は同じ三重県一志郡の地主で、幕末期からつづく親戚だそうです。丸岡氏は『社会思潮』の編集において時々、東中野（東京都中野区）の東畑先生の自宅に通い、指導を仰いでいたとのことでした。

松井 丸岡さんと東畑先生が親戚だとは知りませんでした。和田さんは農林省の農政局長のとき吉田内閣の農林大臣になりましたが、吉田（茂）さんは先に東畑先生に大臣就任を懇請したそうです。

二人は日本の農政の確立に欠いてはならぬ存在だったのです。そして、東畑先生の弟の東畑四郎さんは農林省の農政局長をへて農林事務次官になった人でした。この三人が、日本農政の土台を確立したのです。僕はこれまで、水長が片山内閣の大臣仲間であった和田さんに委員就任を頼んだのだらうと思っていましたが、もう一つ丸岡さんと東畑家との関係があったわけですね。

和田さんは昭和42（1967）年の3月、心臓発作で急死しました。和田さんは趣味人でした。俳人としても有名で、句会に出席する途中だったらしいが、具合が悪くなって芝公園（東京都港区）の街路樹にもたれるように倒れていたのが発見されたのです。社会党は芝のお寺で和田さんの党葬を執り行いました。この社会党の党

葬のとき友人代表として参列され、弔辞を述べたのが東畑精一先生でした。

僕が代議士になったのと前後して、和田さんが正式に社会党に入りました。僕は、和田さんとは三輪（寿壮）先生から紹介されて交わりをもちました。三輪先生と和田さんは大変仲良しで、お互いに行き来して政治談義をしておりました。昭和31年11月、先生が東大病院で亡くなられたとき和田さんが息を切って駆けつけて来られ、部屋に入るや遺体に抱きついて“うおっ、三輪さん”としばらく泣きむせんでおりました。僕はこのときの様子はいまでも思い浮かびます。

僕は和田さんに最初にお会いしたとき、和田さんはいずれ社会党では片山さんに次いで内閣総理大臣になるだろうと直感し、かつ期待しました。和田さんが第一次吉田内閣の農林大臣になったとき彼は45歳でした。若い。けれども人間は1、2回会って、何であれ大事なテーマについて二言、三言話をすれば、たいいていその人の器量や実力がわかります。

和田さんについては、三輪先生から前以て経歴や人物評について聞いておりましたが、社会党の再生の方途について話し合いました。僕は“これは大変な人物だ”と直感しました。

社会党は昭和24年1月の総選挙で、前年に昭和電工事件が起きたことの影響で大敗し、議席が前回の3分の1に激減したのです。和田さんは“政治においては政策と倫理が大事です。きちんと立て直しをすれば大丈夫です”という趣旨の話をされ、代議士一年生であった僕は大変勇気づけられたのです。

鈴木茂三郎さんにぴったりくっ付いていたササコウは、どういうわけか和田さんや江田三郎を嫌っていました。僕は成田（知己）さんが書記長のとき、“長老”として書記長代行を2回引き受け、内外の重要問題で社会党が党声明や

委員長談話を発表しなければならなくなったとき、当時副委員長であった和田さんにそのつど相談し、添削を受けて発表しておりました。和田さんは大局からみる人でした。

河上（丈太郎）さんが病気のため委員長を辞任することになり、後任は二人の副委員長から選ぶことになりました。結果は、和田さんが辞退してササコウが委員長になりましたけれども、党内には和田さんに活躍の場を与えたくないという雰囲気があったのです。左派というよりは、むしろ社会党それ自体の限界だったのだろう。

今回、大竹啓介さんの著書『幻の花（上・下） 和田博雄の生涯』（1981年刊）を改めて読んで参りました。大竹さんによれば、和田博雄氏に対しては片山内閣の安本長官のとき社会党から入党要請があり、1949年3月3日、正式に入党したそうです。和田氏に入党を懇請したのは「現在の危機乗切りは社会党中心の相当思い切った施策を進めなければならない」という事情の中で、「今後社会党の中心となるのは和田博雄以外にない」こと、「将来もう一度社会党内閣ができる情勢になったとき和田を中心にするほかはない」（下、5～6頁）という判断にたったからということのようです。社会党は和田氏に、政策展開においてリーダーシップを期待したようです。

松井 うん、そうなんです。和田さんは当時、官僚中の官僚で、たんに農政通というだけでなく、日本の経済再建の政策立案に欠いてはならぬ人物だったのです。

前にも言いましたけれども、吉田茂が三顧の礼をもって和田さんを第一次内閣の農林大臣に迎え、和田さんはそのあとも片山・芦田の二つの内閣で政策官庁（経済安定本部）の国务大臣を務めました。その和田さんが社会党に入党し

たのです。

当時、和田さんの入党は新聞や雑誌でも大きな話題になりました。この和田さんの社会党入党に、吉田茂は大変なショックを受けたそうです。吉田さんが、大蔵省や通産省の官僚を次から次と自民党に入党させるようになったのは、これ以降のことなんです。

和田さんが『社会思潮』の編集委員になったのは、丸岡さんと東畑家の関係もあったようですけれども、僕はやはり水長が和田さんに直接、頼んだのだと考えております。二人は大臣仲間で大変仲が良かったし、『社会思潮』は主幹であった水長の意向が強く反映されていた雑誌です。水長には『社会思潮』をレベルの高い機関誌にしたいという、すなわち派閥のバランスを気にするような雑誌でなく、日本の再建・復興へ向けての政策雑誌にしようという構想があり、この点に造詣と見識をもつ和田さんに加わってもらおうと考えて、水長が就任を頼んだのだと思います。

ついでにこのことも述べておきます。僕の記憶では、勝間田清一さんも『社会思潮』の編集にとっても協力的だったのです。和田さんが社会党に入り、当初、鈴木茂三郎さんの左派に関係していたといっても、彼はトータルな政策家だったわけで、派閥的な行動をとる人ではない。当時、和田さんが動きにくいことは勝間田さんが代わって行うというような経過がありました。勝間田さんが直接、東畑先生と連絡をとっていたのか、そのへんはわからないが、丸岡さんの話では勝間田さんも編集の企画面であれこれ提案をされ、何かと協力していたそうです。

#### 『社会思潮』の誌面

松井 三輪寿壮、河上文太郎、河野密の3人が編集委員に就任した理由ですが、あなたが手紙で書いていたように公職追放と関係していた

ことは確かだと思います。3人は追放の指定を受けて、公職に就けないわけです。実際、河上さんと河野は党の役員を辞任しました。これは、日労系の運動を指導してきた3人にとって政治活動を行う表向き場がなくなったことを意味します。

党内の主導権はあの頃、片山・西尾さんたちの社民系の右派にありました。また鈴木さんや加藤（勤十）さんの旧日無系の左派は、改革の時代の波に乗ってとても勢いが良かったのです。他方で、日労系の間派には浅沼（稲次郎）がいたけれども病気になってしまって、まとめ役的な存在だった森戸（辰男）先生ももう一つ動きが鈍く、日労系は求心力が弱かったような気がします。

あれやこれやあって、日労系の代議士連中はやはり意見交換など意思疎通する場が必要だったのだろう。社会思潮社は事実上、日労系の“溜まり場”となっていたのです。実際に、社会思潮社は公的機関ではない。社会思潮社は党機関誌の『社会思潮』を発行していたけれども、外部の一出版社ですから、誰が編集委員になろうと構わないわけです。

『社会思潮』の編集を日労系が引き受けたことは、党にとっても良かったと思います。『社会新聞』はのちのことですが、木原実君が編集長格になっていた時期は左派寄りの傾向にありました。田原（春次）さんが『社会新聞』の経営責任者だったころも、記者のうちには左派の立場にたって記事を書く者もいたらしく、ぼやいていたことがありました。この点、『社会思潮』にあっては一方の派閥の見解を重視するということはなかったはずです。

『社会思潮』は創刊1、2年のうちは、ほぼ毎号にわたって憲法制定に対する社会党の態度や、新憲法制定の意義を紹介し、また鈴木義男氏が第2巻2号（1948年2月）から

11回にわたって新憲法の逐条解説を行っています。日本社会党は“護憲の党”といわれてきました。社会党がいかに新憲法の制定を歓迎しその普及をめざしてきたかは『社会思潮』の誌面からもわかります。

松井 片山内閣は新憲法の下での最初の内閣です。司法大臣（法務総裁）の鈴木義男さんが自ら執筆して新憲法の内容と精神を紹介していたわけで、やはり“護憲の党”としての意気込みがありました。鈴木さんはもと東北帝大の刑法かなんかの教授です。片山さんにしろ森戸先生にしろ、また原（彪）さんにしろ、社会党は新憲法の制定に際して学者や弁護士出身の代議士がとても頑張ったのです。

#### 水谷長三郎の役割

総目次をご覧になったと思います。『社会思潮』は、堀真琴「参議院論」（第1巻5号）、梶浦英夫「インフレ防止と産業金融」（第2巻2号）、羽生三七「日本農業の将来」（第2巻5号）、水谷長三郎「炭鉱国家管理と今後の石炭対策」（第2巻6号）など、日本産業の再建や政治改革などに対しても積極的に政策提言を行っています。社会党がめざす日本再建の政策方向については片山哲氏が「日本再建と社会党の針路」（第2巻7号）で明示していますし、水谷長三郎氏も『社会思潮』創刊号の巻頭言で「無血革命を遂行し、新日本を建設することにある」と同誌の使命について述べております。やはり『社会思潮』は政権党の機関誌として、政策論重視の誌面となっています。

松井 あなたは僕への手紙で『社会思潮』が機関誌らしくなく、総合雑誌のような感じがすると書いていました。これは水長の方針です。水長は「がちがちの政治理論誌はいただけない」という考えの持ち主です。三輪先生は常々、政

党は政策で勝負しなければならないと言っていました。水長も同じ見解でしたが、これは僕の勝手な推測ですが、編集委員の全員が三輪先生のような見解をもっていたと思いますよ。だから、『社会思潮』は機関誌だからといって何もかも押し込むことはせず、党における政策を国民に紹介することに留意して編集したのだと思います。

片山哲氏が、著書『回顧と展望』（1967年）において「水谷君は大体、政策面を担当して、盛んに、戦後の政策樹立を研究構想していた」（224頁）と述べ、社会党の政策活動における水谷長三郎氏の存在を高く評価していますね。

松井 そうだろう。社会党に政務調査会が設けられたのは、昭和21年9月の第2回大会のことです。最初の政務調査会の会長は森戸さんです。そして、それ以前における党の政策立案部門の責任者が水長だったのです。また政務調査会の設置とともに、水長は相談役に就任しています。

だから社会党を政策立案の面でみた場合、結党直後における水長の存在はとても大きいのです。結党大会で発表され、採択されたあの政策綱領（「一般政策」）は、水長が中心となって策定したものなんですよ。『社会思潮』が水長が主幹として、また編集委員の中心となっていたからこそ、政策重視の機関誌となっていたのだと思います。ところで、度忘れしてしまったが『社会思潮』の編集長はどなたでしたか。

最初の編集長は岩根正雄氏です。二代目は麻生良方氏です。

松井 麻生良方は日労党の生みの親の麻生久の息子ですよ。彼はいま病気で、思うようにものを書けないらしい。麻生君は親に似て、才気煥発の男でした。文学方面にも造詣がありました。水長は、その最初の編集長の岩根という人



を商工大臣の応接室や国会の第一委員会室の部屋に呼び出して、毎号の編集企画や打ち合わせをしていたのです。水長は『社会思潮』に熱を込めていました。

#### 結党50年へ向けて

松井 社会党はあと4、5年で結党50周年を迎えます。社会党首班内閣として片山内閣を誕生させ、さらに芦田内閣で連立を組み、新しい時代の幕開けに社会党は改革のリーダーシップを取ってきました。しかし西尾(末広)さんが昭和23年6月に、復金融資をめぐる例の昭和電工事件を起こしてつまずいて以来、わが党は政権から遠ざかり万年野党に甘んじて来ました。実に残念なことです。

昭和電工事件が起こったとき、新聞記者が僕に「松井さん、これで(社会党の政権担当が)20年は延びましたな」と言われました。翌24年1月、戦後3回目の総選挙(第24回)が行われ、僕は福島県第3区から出て当選しましたが、演説会の会場へ行って演壇に上がると会場の方々から「西尾どうしたっ」「お前はどうかっ」とヤジが飛び交い、「社会党であろうと何党であろうと、汚職は断じてやめなければならない」と言い訳をしないと演説ができなかったのです。

この総選挙で社会党は惨敗し、前回より100議席も減らして、48議席しかとれなかったのです。前年まで内閣総理大臣であった片山さんまで落選してしまいました。国民の非難批判がいかに強かったかがわかります。

西尾さんは、三輪先生を中心に社会党の弁護団が必死に努力して10年後にようやく無罪を勝ち取りました。けれども社会党は昭和電工事件で實際上、回復不能の打撃を受けたのです。戦後における自民党の一方支配の政治はこのときに始まったのです。

このこととは別に、社会党は結党50周年を機にこれまでの党の歴史を後世に記録として残しておくため、正確で公正な党史をまとめるべきだと思います。僕もみんなの協力を得て、もう一冊『戦後日本社会党私記』(1972年)の増補版みたいなものを出したいと思っているのです。これは、すでに鬼籍に入っているが半世紀にわたって活動を共にした同志に対する務めだと思っています。社会党の本部に当時の資料は何も残っていない。大原社研にはたくさんあるらしい。

ええ。『日本社会新聞』や分裂時代の左・右社会党の機関紙、それに占領期の社会党関係の原資料もファイルに綴じられて残っています。もし何か調べることがあればご連絡ください。ご協力いたします。ところで、松井さんはとてもお元気そうですね。

松井 僕は80歳を超えているんだよ。

元気の秘訣は何ですか。

松井 僕は昔から酒は一滴も飲まない。それが一つ、健康に役立っているんじゃないかと思っています。僕らの仲間でペラボウに酒を飲む連中は実際、早死しているんです。江田三郎しかり、成田知己しかりです。僕は成田書記長・松井総務局長(書記長代理)のコンビで、党務を5年間務めてきました。永田町に、国会議事堂を少し下りたところに酒屋があるんです。飲み屋じゃなくて、普通の酒屋です。成田さんはその酒屋で椅子に腰掛けて冷や酒をグイッと何杯も飲んでいたんですよ。だから成田は早死した。

江田三郎は肝臓が悪かったのです。顔色をみればわかります。医者からもストップがかけられていたらしい。それで僕は「江田君、少し酒を遠慮したらどうかね」と何回も忠告したのです。江田は「俺は好きな酒を止めてまで長生きしたいとは思わないよ」と耳を貸さず、止めよ

うとはしなかった。それで江田三郎は早死した。

酒は適量であれば、血液の循環がよくなって身体にも良いといわれています。飲んで元気が出る人も中にはいるだろう。しかし毎日飲めば健康を害してしまうことは疑いない。本当に、江田三郎も成田知巳も大酒飲みだった。僕はその昔、全農のオルグとなって社会運動に身を投じて以来、酒を飲まないことにしています。これが長生きの秘訣だと思っています。

何回にもわたっての貴重なお話、ありがとうございました。心より感謝を申し上げます。『社会思潮』の解題は来年（1991年）3月までに仕上げなければなりません。松井さんには原稿の段階で目を通して頂ければと

思っております。

松井 承知しました。あなたは話の聞き方がじつにうまい。ゴクンと飲み込んで、腹の中に収めておこうと思っていた事柄まで、僕はつい話をしてしまいました。

あなたの質問に答えようと僕はかなり準備をしました。準備をしている間にもかつての同志のことや昔の社会党のことが思い出されて、胸がつまってしまうことがありました。僕はこの間、少々疲れしました。けれども、やはりこういう機会が与えられないと改めて考えたり調べたりしなかつたらう。僕はあなたに話をして、少し肩の荷が下りたような気がします。僕の方こそむしろ、あなたに感謝を申し上げたい。

（完）

【付記】 松井政吉氏は1993年9月19日、急性心不全により死去された。享年91歳であった。松井氏は日本社会党の派閥関係において最後は“江田派”に属していた。氏からは故江田三郎氏についても記録してほしいとの申し入れがあり、証言のため準備をなさっておられたが、氏の死去により断念の止む無きに至った。残念の極みである。衷心より松井氏の冥福をお祈り申し上げたい。

（吉田 健二）

ILO の 出 版 物  好 評 発 売 中



児童労働ILOビデオ 日本語版

“I am a child!”～働かされる子供たち～

児童労働は、世界中で一斉に非難されているにもかかわらず、未だに世界各地で広く行なわれている人権の侵害である。数千万人にもものぼるといわれる働く子供たち。その多くは、半奴隷状態のもと、危険な作業現場で酷使されている。ケニアの紅茶・コーヒー農園、タイの路上や作業場、ブラジルのサイザル麻畑や炭焼き場で働く子供たちの姿。児童労働の撲滅にむけて、力強いメッセージを投げかけるILOのビデオが今、日本語版で発売。

1998年刊 NTSC 約55分 4,500円



Work organization and ergonomics  
「作業組織と人間工学」

昨今、多くの企業で、作業能率を高め、高品質の製品を生産するために、人間的な作業組織と人間工学的に健全な作業環境の構築が図られている。本書は、その実例を集め、作業組織と人間工学の両面から、生産的かつ効率的で快適な職場作りの具体策を示す。V. D. Martino, N. Corlett共編 1998年刊 211p. 2,500円

ご注文は下記へ

**ILO 東京支局**

〒150-0001 東京都渋谷区神宮前5-53-70 国際連合大学本部ビル8階  
TEL.03-5467-2701 FAX.03-5467-2700  
郵便振替 00140-2-19221番 / さくら銀行神宮前支店 普通口座3149206